

# 夢の田々(一)

二人で入園し、

三人で卒園

大 多 和 檀



私は、平成五年四月から平成七年三月まで、港区立神明幼稚園で、「エッ！二人？」と、たくさんの人たちから——特に幼稚園の先生にこの反応は多かったです——びっくりされた担任時代を体験しました。二人が三人となって——年長の九月に一人迎えました——卒園した三月に公立幼稚園を退職し、四月から、木々にかこまれた、冬は丹沢おろしの寒い風が通り抜け、その代わり、夕方には夕陽と富士山のシルエットがとても美しく見える、園児三百五十名の私立幼稚園に転職しました。

そして、この年、園児のお母様から『七歳までは夢の中』という松井るり子さんの本を紹介されたのです。読む前に、私の探していたのはこの言葉だったのだと、題名にドキドキするほど、うれしくなっていました。

そんなにも感動したのは、はじめて担任を離れ、三百五十名という人数からくる様々な制約、バス通

▼芝離宮のふじ棚の前で

左から二人目、三人目がせいじくん、ふみちゃん、その後ろが私。

年長さんが六人いて、合わせて“エイトマン”でした。



園がほとんどという園に身を置き、つくづく「せいちゃん、ふみちゃん、さおちゃんと過ごしたあの神明幼稚園時代は、今の私からは、夢の中の生活だった」とアルバムを見ては思っていたからです。

それに加え、私は「幼稚園における生活は、いかに子どもの思いをふくらませかなえていくかに他ならない」と考えていま

したが、これは松井さんの題名をお借りして言うなら、「幼稚園時代は夢の中」という思いだったのだと気付かされたからだと思います。その夢の中のような生活のできた神明幼稚園は、JR浜松町駅から五分のところであり、古くからの商店が残っているところ

です。  
三人（ふみこ、せいじ、私）で夢の中のような園生活を送れたのには、たくさんの恵まれた環境があったのですが、今回は、この「古くからの地元の商店」の方たちの話をしたいと思います。

大和屋さんのおばさんは三人で買い物に行くと、「かわいいわねー。先生、自分の子どもみたいでしょ」「今度は何作るの?」といつも声をかけてくれ、おじさんがいればニコニコと見ていてくれました。このおじさんは神明小同窓会長さんでした。

よく行くお店はあと二軒あります。八百赤さんと森電気屋さんです。



八百赤さんではウサギやニワトリの野菜をもらうのですが、ネコを飼っていて、ある日、「こっちにネコの赤ちゃんがいるよ」と、狭い路地に連れて行って見せてくれました（私は入れませんでした）。このあとは、ここを通るたびに必ず路地をのぞいたものです。「ネコ、いるかなあ」と。

森電気屋さんではダンボール箱をもらうのです。本当によくダンボール箱を使いました。「神明幼稚園ですけど、ダンボール箱ください」と行くと、「これがいいか」「あれがいいか」と選んでくれたり、「他の幼稚園からお友達送ってもらえ、このダンボール箱で」と冗談を言われたり……。

地元商店の、言うなれば全く赤の他人の大人に、「かわいいわね」という思いやまなざしにかこまれていたことは、ふみちゃん、せいちゃん、さおちゃんの生活を幸せにしていたと思います。

(まこと幼稚園)